

研究資料

小学生がおこなう向社会的行動

—向社会的行動に関する発達心理学・教育心理学の研究方法の動向—

齋藤 信¹, 杉山 佳菜子²

要旨

本研究では、小学生がおこなう向社会的行動に関する発達心理学・教育心理学の研究方法の動向について検討した。CiNii Articles(日本の論文をさがす)の検索機能に基づいて、16件の論文を、研究参加者、測定1(測定方法)、測定2(測定変数)の3点から分析した。これらの分析から研究参加者の学校段階・学年により用いられやすい測定方法を指摘して、児童の側の枠組みに立った向社会的行動の研究の重要性について指摘した。さらに、測定2(測定変数)において、行為、理由・動機づけ、相手の変数について、統合的に扱うことと変数間の関連を示すことの重要性を提唱した。

キーワード：小学生、向社会的行動、研究方法

向社会的行動(prosocial behavior)は「他の個人や集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとしてなされた自主的な行為」と定義されている[Eisenberg, 1982; Eisenberg & Mussen, 1989 菊池・二宮 1991]。行動の例として、寛容さ、同情を表す、持ち物を分ける、慈善団体への寄付、不平等や不正を社会から追放することによって福祉を高めようとする活動への参加などがある[宗方, 1992]。

日本の小学生の向社会的行動に関する発達心理学・教育心理学の研究において、どのような研究がおこなわれているのであろうか。国立情報学研究所の論文検索サービス CiNii Articles(日本の論文をさがす)の、フリーワード検索で検索したところ、「向社会的行動 児童(63件)」「向社会的行動 小学生(28件)」であった(2022年01月31日アクセス)。この中で学会誌「発達心理学研究」「教育心理学研究」に掲載された論文は、合わせて12件であった。本研究では、これら以外の学会誌・紀要論文4件を合わせた16件の論文の研究方法(研究参加者・測定)について検証することを目的とする。

Table 1, Table 2は本研究における16件の論文整理表であり、著者、掲載年次、研究参加者、測定1(測定方法)、測定2(測定変数)と分類をまとめて掲載している。なお調査・実験が複数回おこなわれたものについては、小学生が参加者となっているもの、(予備調査・予備実験ではなく)本調査・本実験でおこなわれているものを中心に、まとめて掲載した。

¹ こども教育学部こども教育学科こども教育学専攻

² 愛知みずほ短期大学現代幼児教育学科

1. 研究参加者

研究参加者は学校段階・学年で掲載している (Table 1)。児童期にあたる小学生を中心に、保育園から大学生、さらには教師・保護者が研究参加者となっている。これらは上下の学校段階とつながる場合を含めて (1) 低学年中心 (2) 中学年・高学年中心 (3) 学校段階・学年を限定しない の研究に分類されると考えられる。

Table 1 小学生がおこなう向社会的行動の論文整理表(研究参加者)

著者	年次	研究参加者	研究参加者 分類
宗方・二宮	1985	保育園年中, 小1, 小3, 小5, 中1, 中3, 高2	学校段階・学年を限定しない
桜井	1986	小5, 小6	中学年・高学年中心
渡辺・衛藤	1990	小6	中学年・高学年中心
岩立	1991	小4, 小5, 小6	中学年・高学年中心
鈴木・松田	1992	小2, 小3	低学年中心
金子・新瀬	2002	小3, 小4, 小5, 小6, 父母	中学年・高学年中心
伊藤	2004	小2, 小4, 教師	学校段階・学年を限定しない
高井	2004	小2, 小4, 小6, 大学生	学校段階・学年を限定しない
清水	2010	幼稚園年長, 小1, 小2	低学年中心
山村・中谷	2012	小4, 小6	中学年・高学年中心
伊藤他	2014	小1, 小2, 小3, 小4, 小5, 小6, 中1, 中2, 中3, 保護者	学校段階・学年を限定しない
村上・西村・櫻井	2014	小5, 小6, 中1, 中2, 中3	中学年・高学年中心
村上・西村・櫻井	2016	小4, 小5, 小6, 中1, 中2, 中3	中学年・高学年中心
山村	2017	小4, 小6, 大学生	中学年・高学年中心
山本・河村・上淵	2021	小4, 小5, 小6, 中1, 中2, 中3	中学年・高学年中心
松山・真田・栗原	2021	小5, 小6	中学年・高学年中心

(1) 低学年中心

鈴木・松田 [1992], 清水 [2010] が該当すると考えられる。清水 [2010] では幼稚園年長児が同時に対象とされており、幼児期から小学校低学年を対象とした研究である。

(2) 中学年・高学年中心

桜井 [1986], 渡辺・衛藤 [1990], 岩立 [1991], 金子・新瀬 [2002], 山村・中谷 [2012], 村上・西村・櫻井 [2014, 2016], 山村 [2017], 山本・河村・上淵 [2021], 松山・真田・栗原 [2021] が該当すると考えられる。村上他 [2014, 2016], 山本他 [2021] は、小学校中学年・高学年から中学校1年生・2年生・3年生を対象とした研究である。また山村 [2017] は小学校中学年・高学年の児童と大学生を対象としている。さらに金子・新瀬 [2002] は小学校中学年・高学年の児童と父母を対象としている。

(3) 学校段階・学年を限定しない

宗方・二宮 [1985], 伊藤 [2004], 高井 [2004], 伊藤他 [2014] が該当すると考

えられる。なかでも幅広い学校段階・学年を対象としているのが宗方・二宮 [1985]，伊藤他 [2014] であろう。また伊藤 [2004] では教師にも，伊藤他 [2014] では保護者にも向社会的行動の評定・評価を求めている。

2. 測定 1 測定方法

測定 1 として測定方法の分類を試みる。大きく (1) 例話・場面 (2) 質問紙・尺度 (3) 自由記述 に分類されると考えられる (Table 2)。

(1) 例話・場面

宗方・二宮 [1985]，渡辺・衛藤 [1990]，鈴木・松田 [1992]，伊藤 [2004]，高井 [2004]，清水 [2010]，山村 [2017] が該当すると考えられる。例話を用いた測定は，道德性の発達の研究でも用いられているものであり [山岸，1976]，認知構造の発達を捉える測定方法として一般的なものである。例話の呈示方法としては，物語・図版・映像が用いられている。研究参加者との関連を見ると，低学年中心の研究である鈴木・松田 [1992]，清水 [2010] はいずれも例話・場面に該当しており，幼児・低学年の児童も取り組みやすい測定方法であると考えられる。

(2) 質問紙・尺度

桜井 [1986]，岩立 [1991]，金子・新瀬 [2002]，伊藤他 [2014]，村上他 [2014, 2016]，山本他 [2021]，松山他 [2021] が該当すると考えられる。研究参加者との関連を見ると，質問紙・尺度の測定方法は小学校中学年・高学年以上が対象となっていることが多く，言語理解が進んだ段階の児童に用いられる傾向があると考えられる。

(3) 自由記述

岩立 [1991]，山村・中谷 [2012] が該当すると考えられる。(2) 質問紙・尺度と同様に，小学校高学年以上に用いられる傾向があり，言語理解が進んだ段階の児童に用いられる傾向があると考えられる。

3. 測定 2 測定変数

測定 2 として測定変数の分類を試みる。大きく (1) 行為 (何をするのか) (2) 理由・動機づけ (なぜするか) (3) 相手 (誰にするのか) に分類されると考えられる (Table 2)。

(1) 行為

宗方・二宮 [1985]，桜井 [1986]，渡辺・衛藤 [1990]，岩立 [1991]，鈴木・松田 [1992]，金子・新瀬 [2002]，伊藤 [2004]，高井 [2004]，清水 [2010]，山村・中谷 [2012]，伊藤他 [2014]，村上他 [2014, 2016]，山村 [2017]，山本他 [2021]，松山他 [2021] で 16 件全てが該当すると考えられる。これらは向社会的行動として何をするのかの選択に関するものであり，最も測定されやすいものである。

[2] 理由・動機づけ

宗方・二宮 [1985]，渡辺・衛藤 [1990]，岩立 [1991]，伊藤 [2004]，松山他 [2021] が該当すると考えられる。理由・動機づけを問うことは道德性の研究の基礎 [山岸，1976] につながるものであり，児童の認知構造の発達に関連するものである。

[3] 相手

村上他 [2016] , 山本他 [2021] は向社会的行動の行為とともに相手 (誰に向社会的行動をするか) に着目した研究であると考えられる。

4. 考察

本研究では、小学生がおこなう向社会的行動についての発達心理学・教育心理学の研究方法の動向について、研究参加者、測定 1 (測定方法)、測定 2 (測定変数) の 3 点から検証した。

研究参加者については (1) 低学年中心 (2) 中学年・高学年中心 (3) 学校段階・学年を限定しない の 3 つに分類した。測定 1 (測定方法) については、(1) 例話・場面 (2) 質問紙・尺度 (3) 自由記述 の 3 つに分類した。さらに測定 2 (測定変数) については、(1) 行為 (2) 理由・動機づけ (3) 相手 の 3 つに分類した。

測定 1 (測定方法) における (1) 例話・場面の測定方法は、向社会的行動の文脈・枠組みを明らかにするため、低学年以下の児童にも用いることができる。一方、同じく測定 1 (測定方法) における (2) 質問紙・尺度は中学年・高学年以上の児童にも用いることができ、複数の尺度を組み合わせ、変数同士の関連性を検証することもできる。しかしながら、これらの測定方法では、研究者の側が向社会的行動の文脈・枠組みを決めているという側面があり、児童たちの考える向社会的行動を捉えているかについては、疑問が残ると思われる。こうしたところで測定 1 (測定方法) の (3) 自由記述は、児童たちの考える向社会的行動の枠組みに近づくものである。自由記述の低学年の児童への実施については、困難さも考えられるが、児童たちの向社会的行動に対する枠組みを明らかにする意味では意義があると考えられる。また自由記述の実施後の分析については“手作業”による分析がおこなわれてきたが [岩立, 1991 ; 山村, 2012] , 近年は WordMiner [テキストマイニング研究会, 2022] , KH Coder [樋口, 2020] などのテキストマイニング用のソフトも普及しており、新たな分析のアプローチも可能となっている。

測定 2 (測定変数) における、(1) 行為 (2) 理由・動機づけ (3) 相手 の 3 つの分類については (1) 行為 が最も多く研究として扱われており、(2) 理由・動機づけは認知構造の発達の研究の基盤につながる測定変数である。一方、これらの 3 変数が統合的に扱われ、3 者の関連性が示されることが今後の課題であると思われる。

本研究では、小学生がおこなう向社会的行動についての研究方法の動向について考察したが、対象とした論文は限定されていたので、より多くの先行研究を含めた検討が今後の課題であると考えられる。

Table 2 小学生がおこなう向社会的行動の論文整理表(測定)

著者	年次	測定	測定1 測定方法	測定2 測定変数	分類
宗方・二宮	1985	向社会的行動の例話(図版)および行為の選択・理由	例話・場面	行為, 理由・動機づけ	行為, 理由・動機づけ
桜井	1986	児童用共感測定尺度, 児童用社会的望ましき測定尺度, 向社会的行動質問紙(PBD)	質問紙・尺度	行為	
渡辺・衛藤	1990	児童用共感測定尺度, 向社会的行動の例話および行為の選択・理由と共感	例話・場面	行為, 理由・動機づけ	行為, 理由・動機づけ
岩立	1991	向社会的行動質問項目15項目および理由(帰属要因)の自由記述	質問紙・尺度, 自由記述	行為, 理由・動機づけ	行為, 理由・動機づけ
鈴木・松田	1992	向社会的行動の例話(映像)による行為(寄付)の選択	例話・場面	行為	
金子・新瀬	2002	向社会的行動尺度29項目, 養育態度尺度	質問紙・尺度	行為	
伊藤	2004	向社会的行動の例話(図版)における感情・動機づけ評定と認知評定, 教師による向社会的行動評定	例話・場面	行為, 理由・動機づけ	行為, 理由・動機づけ
高井	2004	例話(図版)および道徳的違反と慣習的違反に対する謝罪などの行為の選択	例話・場面	行為	
清水	2010	例話(図版)と危険回避課題・向社会的行動課題の行為の選択	例話・場面	行為	
山村・中谷	2012	「思いやりがあるなあ」と思った友だちの行為の自由記述	自由記述	行為	
伊藤也	2014	肯定的・否定的養育行動尺度, SDQの保護者評定フォーム(児童・青年の不適切行動や向社会的行動の評価)	質問紙・尺度	行為	
村上・西村・櫻井	2014	こども用認知・感情共感性尺度, 共感測定尺度, 児童用多次元共感性尺度, 肯定感情共有尺度, ソーシヤルスキル尺度, 社会的望ましき尺度, 向社会的行動尺度(愛他性尺度), 攻撃行動尺度	質問紙・尺度	行為	
村上・西村・櫻井	2016	小中学生用対象別向社会的行動尺度, 中学生版向社会的行動尺度, 児童用自己意識尺度, 児童用共感測定尺度, 学級生活満足度尺度	質問紙・尺度	行為, 相手	
山村	2017	自尊感情尺度, 被援助志向性尺度, 向社会的行動の例話(図版)における葛藤場面の方略の選択	例話・場面	行為	
山本・河村・上淵	2021	学級の社会的構造目標尺度(向社会的目標構造, 規範遵守目標構造), クワスマイトとの関係への動機づけ, 小中学生用対象別向社会的行動尺度(女たち)	質問紙・尺度	行為, 相手	
松山・真田・栗原	2021	介入行動意図尺度, 社会的責任目標尺度(向社会的目標), 多次元共感性尺度(被影響性・自己指向的反応), 中学生版向社会的行動尺度	質問紙・尺度	行為, 理由・動機づけ	行為, 理由・動機づけ

引用文献

- Eisenberg, N. (1982): *The development of prosocial behavior*. New York: Academic Press.
- Eisenberg, N., & Mussen, P. (1989): *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (アイゼンバーグ, N. 菊池 章夫・二宮 克美 (共訳) (1991) : 思いやり行動の発達心理 金子書房)
- 樋口 耕一 (2020) : 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— ナカニシヤ出版
- 伊藤 順子 (2004) : 向社会性についての認知はいかに行動に影響を与えるか—価値観・効力感の観点から— 発達心理学研究, 第 15 巻, 162-171.
- 伊藤 大幸・中島 俊思・望月 直人・高柳 伸哉・田中 善大・松本 かおり・大嶽 さと子・原田 新・野田 航・辻井 正次 (2014) : 肯定的・否定的養育行動尺度の開発—因子構造および構成概念妥当性の検証— 発達心理学研究, 第 25 巻, 221-231.
- 岩立 京子 (1991) : 児童の向社会的行動場面における帰属要因の自由記述による検討 東京学芸大学紀要 第 1 部門 教育科学, 第 42 巻, 23-31.
- 金子 劭榮・新瀬 和夫 (2002) : 小学生の向社会性と親の養育態度 金沢大学教育学部紀要 教育科学編, 第 51 巻, 145-158.
- 松山 康成・真田 穰・栗原 慎二 (2021) : 友人同士の対立場面における介入行動意図尺度の作成, 教育心理学研究, 第 69 巻, 1-9.
- 宗方 比佐子 (1992) : 向社会性理論—アイゼンバーグ— 日本道徳性心理学研究会 (編著) 道徳性心理学—道徳教育のための心理学— (pp. 249-262) 北大路書房
- 宗方 比佐子・二宮 克美 (1985) : プロソーシャルな道徳判断の発達 教育心理学研究, 第 33 巻, 157-164.
- 村上 達也・西村 多久磨・櫻井 茂男 (2014) : 小中学生における共感性と向社会的行動および攻撃行動の関連—子ども用認知・感情共感性尺度の信頼性・妥当性の検討—発達心理学研究, 第 25 巻, 399-411.
- 村上 達也・西村 多久磨・櫻井 茂男 (2016) : 家族, 友だち, 見知らぬ人に対する向社会的行動—対象別向社会的行動尺度の作成— 教育心理学研究, 第 64 巻, 156-169.
- 櫻井 茂男 (1986) : 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究, 第 34 巻, 342-344.
- 清水 由紀 (2010) : 幼児・児童は危険回避行動と向社会的行動のいずれを優先させるか—安全教育のデザインのための基礎的研究— 発達心理学研究, 第 21 巻, 322-331.
- 鈴木 伸子・松田 文子 (1992) : モデルの示す援助コストが児童の寄付行動に及ぼす効果 発達心理学研究, 第 3 巻, 25-32.
- 高井 弘弥 (2004) : 道徳的違反と慣習的違反における罪悪感と恥の理解の分化過程 発達心理学研究, 第 15 巻, 2-12.
- テキストマイニング研究会 (2022) : WordMiner サポートサイト Retrieved from <https://wordminer.org/> (2022 年 02 月 13 日)
- 渡辺 弥生・衛藤 真子 (1990) : 児童の共感性及び他者の統制可能性が向社会的行動に及ぼす影響 教育心理学研究, 第 38 巻, 151-156.

山岸 明子（1976）：道徳判断の発達 教育心理学研究，第 24 卷，97-106.

山本 琢埃・河村 茂雄・上淵 寿（2021）：学級の社会的目標構造とクラスメイトへの自律的な向社会的行動との関連—小中学生の差異に着目して— 教育心理学研究，第 69 卷，52-63.

山村 麻予（2017）：葛藤場面における向社会的行動方略の発達的变化—小学生と大学生の比較から 人間環境学研究，第 15 卷，9-15.

山村 麻予・中谷 素之（2012）：児童が考える「思いやり」行動とはどのような行動か—小学生を対象にした自由記述調査から— 大阪大学教育学年報，第 17 卷，31-44.

こども教育学部こども教育学科 m-saito@suzuka.ac.jp

Prosocial behaviors of elementary school students
—Research trends of developmental and educational psychology on prosocial
behavior of elementary school students—

Makoto SAITOH, Kanako SUGIYAMA

Keywords elementary school student , prosocial behavior, research method